

Mrs. Steiner

よみがえる心のかげ橋

— 日下部太郎 / W・E・グリフィス —

A. Griffith

*Taro Kwakabe
Rutgers College
New Brunswick*



日下部太郎



W・E・グリフィス

はじめに

日下部太郎は、今から一一五年ほど前、福井藩最初の海外留学生として、アメリカのニュージャージー州ニューブランズウィック市のラトガーズ大学に入学し、ことばの不自由ななかで、つねにクラスで一番の成績をおさめ、多くのアメリカ人を驚かせた青年です。不幸にも卒業を目前にして重い病氣にかかり、わずか二十六歳で生涯をとおしましたが、当時外国から立ちおくれた日本を、早くりっぱな国にしようと学問にはげんだ熱心な態度は、まわりのアメリカ人に非常な尊敬をいだかせました。

中でも、アメリカで太郎にラテン語を教えたグリフィス博士は、太郎の優秀さと誠実な人柄に深く感動し、太郎を生んだ日本に大きな関心を持つにいたりました。そして、不思議な縁から、やがて福井藩の学校「明新館」の先生としてまねかれ、福井の少年達に理化学を教えることになりました。その後もグリフィス博士は、著書や講演によつて日本を世界に紹介し、外国人に正しい日本の姿を知らせるなど、数少ない日本の理解者として活躍しました。

こうした日下部太郎とグリフィス博士の出会いが縁となつて、こんど福井市とニューブランズウィック市は、姉妹都市の関係をむすぶことになりました。教育・文化・産業など、いろいろな方面で交流して、おたがいの友好をいつそう深めていこうというのです。それは、一〇〇年以上もむか

し、はるばる福井からアメリカへ渡つた日下部太郎と、グリフィス博士の間にかけられた心のかけ橋を、より広く大きく育てようとする、二つの国の人々の長年の願いだったのです。

皆さんも、この二人の遺志^{いし}をついで、社会に貢献^{こうげん}する立派な人間として成長されることを願つてやみません。この本が、そうした意味で、皆さんの今後の生き方を考える上に少しでも役立つてくれれば幸いです。

昭和五十七年四月

福井市長 大 武 幸 夫

よみがえる心のかげ橋

— 日下部太郎／W・E・グリフィス —

目 次

第一部 福井で最初の海外留学生、日下部太郎

◇ 生い立ちのころ……………	2
◇ 「明道館」に学ぶ……………	3
◇ 鎖国から開国へ……………	6
◇ 八十八の決意……………	9
◇ 留学生「長崎第四号」……………	11
◇ 太平洋を越えて……………	13
◇ ラトガーズ大学生 日下部太郎……………	15
◇ 生活の苦しみ……………	17
◇ おそいかかる病気……………	18
◇ 異国に眠る……………	20

第二部

日本の良き理解者、グリフィス

◇ 大きな出会い……………	24
◇ 夢見る少年……………	26
◇ 牧師への道……………	28
◇ 新たな使命……………	29
◇ グリフィス福井へ……………	31
◇ 福井でのグリフィス……………	34
◇ 別れ……………	37
◇ 深いきずな……………	39
よみがえる心のかげ橋……………	
◇ よみがえる交流……………	44
◇ 深まる友好……………	47

付録 年表

第三部

よみがえる心のかげ橋

(表紙にデザインしたのは、日下部太郎とグリフィス博士の自筆署名です)

第一部

福井で最初の海外留学生

日くさ下か部べ太郎

福井で最初の海外留学生

日下部太郎

生い立ちのころ

日下部太郎は、弘化二年（一八四五年）六月六日、武家屋敷の立ち並ぶ福井城下の江戸町（現在の宝永四丁目（一角））に、父、八木郡右衛門、母、おくまの長男として生まれました。

父の八木郡右衛門は、百五十石ごりの武士で、福井藩の武士としては中ぐらいの身分でした。郡右衛門は武術にすぐれ、城の重要な御門や建物を守る御先物頭という役目を務めていました。

両親は、待ち望んでいた男子の誕生に大喜びで、その子に八十八という名をつけました。八十八は、気まじめで、きびしい父と慈愛深い母のもとで、若竹のようにすくすくと育ちました。そして、早くから武士としてのきびしいしつけや学問を受けました。それは、健康でかしい人になつてくれるようにとの両親の願いでもありました。

両親の願いどおり、八十八はとても元気で、勉強熱心な少年になりました。もともと読書が好きだった上に、だれにも負けないほどの努力をしたので、十歳のころには、漢文ばかりで書かれた大人にもむずかしい書物を自由に読みこなすほどでした。

でも八十八は、本ばかり読んで家に閉じこもっているような、ひ弱な少年ではありませんでした。むしろ、いたずらつ子と言われるほどに元気な少年だったのです。

八十八は、丸顔で額が広く、おとなしそうな感じの少年でしたが、武士の子として毎日剣術にも汗を流し、夏には、きまつて九頭龍川にまで出かけて急流で泳いだり、魚を捕ったりしました。またある時の神明神社の祭りでは、近所の少年たちと遊んでいて、つい調子に乗り過ぎて高いへいの上から落ち、足に大けがをしたという話も残っています。

その後も八十八の学力はぐんぐん伸び、やがて十三歳のころからは、藩の学校「明道館」に入つて学問に励むことになりました。当時、藩校は十五歳以上の藩士の子どもを入学させることにしていました。十五歳以下の者でも実力のある者には、よく調べた上で入学を許していたのです。

「明道館」に学ぶ

明道館は、そのころ我が国で最もすぐれた殿様の一人といわれた第十六代の福井藩主松平春嶽公

が、西洋の進んだ文明からとり残されてしまった日本の立場を心配し、これからの日本を背負って立つような、立派な人間を育てあげる目的で、安政二年（一八五五年）六月に建てた藩の学校でした。場所は城内三の丸（現在の大手二丁目）にありました。

この学校では、儒学じゆがくと呼ばれた中国の古い教えを中心に、兵学（戦いの学問）、剣術や馬術、日本や中国の歴史、礼儀作法れいぎ、それに、算術、医学、蘭学らんがく、和歌や文章、書道といった科目が教えられました。

この学校で大切にされたことは、日本の昔からの学問をとおして、日本人としての考え方を身につけるとともに、科学技術の面ですぐれている西洋の学問をも進んで学ぶこと、机の上の理くつばかりでなく、体をしつかり鍛えきた、学んだことを実行できる人間になることでした。

春嶽公は、明道館をもつと立派な学校にするため、安政三年（一八五六年）七月、江戸で勉強していた橋本景岳けいがく（左内）を福井に呼びもどして、明道館の先生にしました。そして翌年あつねには、学監がくかん同様心得どうようこころえ（校長）を命じました。春嶽公三十歳、橋本景岳二十四歳の時のことでした。

橋本景岳がこの学校で実際に教えたのは、わずか一年ほどでしたが、景岳はこれからの日本には、洋学の研究がきつと必要になると考え、洋書習学所という西洋の学問を学ぶ教室を新たに作りました。また今までの科目のほかに、分析ぶんせき（化学）、想像開物（物理）、測量、天文、地理などの学科を設けて、明道館のいっそうの充実に努めました。

社会に役立つ学問をしなければならぬという橋本景岳の教えで、藩の人々の、新しい知識を学

ぼうとする熱意は驚くほど高まり、やがて、福井の医学や西洋の学問についての研究は、日本でも最高の水準に達するほどになりました。それは、橋本景岳のそうした努力が実を結んだものだったのです。

八十八少年がその少年時代を、このように立派な教育を目標にしたこの学校で過ごせたことは、とても大事なことでした。八十八少年は、橋本景岳の燃えるような情熱と立派な人柄に触れ、学問へのしつかりとした志を持ったに違いありません。

八十八少年の勉学は周囲の人も目を見はるほどに進み、十四歳の時には、藩主から成績が優秀であるとほめられ、そのほうびとして「小学」という中国の書物と墨をいただいたほどでした。

さて、八十八少年が育ったところは、日本の歴史の大きな流れから見ても、大変困難な時代でした。中でも、春嶽公のように責任ある立場にあつて、日本の国を正しい方向に導いて行こうとする人々の苦心や努力は大変なものがありました。そんな時のことです。国の政治の舞台で活躍するようになつていた橋本景岳が、安政五年（一八五八年）九月、安政の大獄という大事件に関連して、幕府に捕らわれてしまいました。景岳は堂々と、自分の信念を述べ、自分が公明正大であることを主張しましたが聞き入れられず、翌年の安政六年（一八五九年）十月七日、どうとう処刑されてしまいました。実に二十六歳の若さでした。

郷土の尊敬する先輩であり、ついこの間まで明道館の学監同様心得でもあつた橋本景岳が処刑されるというこの事件は、八十八少年にとって大きな驚きであり、いつそう広く学問への目を向けさ

せることになったのでした。

鎖国から開国へ

それでは、この当時の日本には、どのような問題が起きていたのでしょうか。少しさかのぼって説明してみたいと思います。

我が国では江戸時代の始め、寛永十六年（一六三九年）に幕府の考えて鎖国令が出されました。これは当初、これ以上キリスト教が広がると政治がしくくなると思った幕府が、これを禁止し、信者を取りしまったことに始まりました。やがて貿易の制限や日本人が海外へ渡ることの制限に進み、島原の乱（長崎、島原の信者が武器をとって領主に反抗した）後は、オランダと中国（当時の清国）の二か国以外は、いつさい外国との交際を禁じました。それはちやうど、縁側の雨戸をびったり閉め切り、そのわずかなすきまから、ときどき外のようなすをうかがうようなものでした。それに、この鎖国令は、その後二百年以上もの長い間続いたのでした。

さて、その間に、世界の国々は、大きく変わっていききました。

イギリスやヨーロッパの国々では、近代的な工業が発達し、新しく発明された機械で大量の品物が生産されるようになりました。それらの国々は、生産に欠かせない原料を求めるため、また製造

した商品を売りさばく必要から、争って東洋の国々に進出してきたのです。そして、その強大な軍事力で、東洋の各地を植民地（外国の領地を自国の支配下に置く）にしていきました。イギリスと清国の間に起きた阿片戦争（一八四〇―一八四二）と呼ばれる戦いも、そのことを物語る事件でした。

やがて、日本の近海にも、ロシア、イギリス、アメリカ、フランスなどの船が姿を見せはじめ、盛んに貿易を求めてくるようになりました。そしてついに、嘉永六年（一八五三年）六月、黒い船体をした大きな四隻の軍艦が浦賀（神奈川県横須賀市）にやって来ました。大砲を撃ちとどろかせ、黒い煙りをもくもくとはく、この不気味な鉄の黒船を目の前に、人々はもうびつくりして、心配のあまり夜も眠られなかったということです。

これは、日本の開国を望むアメリカ大統領の手紙をもったペリー提督の艦隊でした。翌年、再び来航したペリーの要求を受け入れて、幕府は日米和親条約を結び、こうして、我が国は鎖国という二四〇年間の長い眠りから覚めることになったのです。



黒船来航の図

外国が武力を背景にして開国を迫るといふありさまに、春嶽公をはじめとする心ある人々は、日本が重大な危機にさらされていると感じました。春嶽公やそれらの人々は、早くから、国を開いて外国と交際し、外国のすぐれた点をどんどん学んで、日本を西洋の国々と肩を並べられるような立派な国にしなければならぬと考えていました。そして、清国のように外国の武力にくっついて、国の一部を取られてしまうようなことがあつてはならない、しっかりと国を守つて、日本の独立を守らなければならぬと考えたのでした。

しかし、そのような時には、国の方針がしつかり定まっていなければなりません。日本の政治の中心に立つ將軍が、立派な人物で皆を正しい方向にぐんぐん引っぱつて行くようではなくてはなりません。

ところが、その当時は、朝廷や多くの大名がまつ先に開国に反対をとなえていましたし、それに、その時の十三代將軍徳川家定も病気がちでした。そのため一日も早く、すぐれた人物を家定將軍のあとつぎに決め、その人を中心にして今の困難な時を乗り切つて行かねばならぬとなりました。

この外国との交渉をどうするかという問題と、次の將軍選びの問題は、不幸なことに日本を二つに分けて争う大事件にまで進展し、国内は大変な混乱に陥りました。

しかし、春嶽公らの、日本を小さな藩の寄り集まりと見ず、同じ目標に皆が力を合わせて突き進む、一つに統一された国家として考える考え方は、やがて、日本が明治という新しい時代を迎える上で、非常に重要な働きをする事になったのでした。

八十八の決意

歴史の大きな流れは、八十八少年が福井に留まることを許しませんでした。

慶応元年（一八六五年）、二十一歳の立派な青年に成長した八十八は、その年の九月、藩の命令によつて長崎へ行き、英学の勉強に励むことになりました。そのころは、日本人が海外へ行くことはまだ許されていなかったため、西洋の学問をしようとすれば、外国人の先生がたくさんいる長崎へ行く必要があつたからです。

ここには、日本の各地から、八十八と同じような青年が集まり、洋学や医学などの新しい知識を学びとろうと情熱を燃やしていました。

八十八は、米国人宣教師（キリスト教を教え広める人）フルベッキが校長をしている幕府の洋学所「済美館」に入學し、英語などの語学はもちろんのこと、洋算（数学）などの必要な学問を学びました。ここでも八十八は、齒をくいしばつて勉強し、全国から集まつたどの学生にも負けないとびぬけた成績を修め皆をおどろかせました。

しかし、向學心に燃える八十八はそんなことで満足するような青年ではありませんでした。もっと大きな夢を抱いていたのです。できれば実際に海外へ渡つて、もっと深く、もっと多くの知識を身につけたいと思うようになっていました。たしかに、長崎に来ていた学生の中には、外国の船に

に留学させて下さい。この国は新しくできた国で、人々が立派な国づくりに励はげんでいる国と聞いています。それに異国の人にも親切だそうです。私はまず、この国に渡って、必要な知識を学びたいと思います。

父上、どうか私のこの願いをお聞きとげ下さい。」

八十八の真剣な申し出に、じいっと耳を傾ななけていた父の郡右衛門は、やがて大きくなずき、八十八の決心をほめると、心から激励げんれいしてくれるのでした。

父の許しを得た八十八は喜び勇んで、藩に海外渡航の願いを提出しました。

藩でも前から、留学生を海外へ送ることを考えていましたし、それに、八十八の学問の力を認めていましたので、その年の九月、八十八を正式に藩の海外留学生として、アメリカに送ることに決定しました。

努力のかいがありました。今までの努力が報われたのです。八十八はこの知らせにどんなに胸おどらせたことでしょう。なにしろ、福井藩最初の海外留学生として、自分が選ばれたのです。

留学生「長崎第四号」

海外へ行くことになった八十八は、名前を八木八十八から日下部太郎と改めました。「日下部」

は、八木家の先祖からの姓で、「太郎」は、その家の長男といった意味です。

太郎は、長崎の外国事務局に日下部太郎の名で、海外渡航の手続きを行いました。そして次の年の慶応三年（一八六七年）二月、外国事務局から嗜れて、三か年有効の海外渡航免許状（パスポート）が交付されたのです。

幸いにも、この時の免許状の写真が残っていますが、それには、「長崎第四号」とありますから、日下部太郎は、この年、長崎を出航した四番目の海外渡航者であったわけです。

また、この免許状には、「生国、越前の国、松平越前守家来、日下部太郎」という本人の身元と、本人の写真の代わりに、「面長キ方」「身長五尺三寸五分（約一六二センチ）」「眼、常体」「口、大ナル方」といった顔や体の特徴などが記されています。それにしても、渡航の手続きもすませ、出発を待つだけの太郎の気持ちはどんなだったでしょう。

家族と別れ、たった一人、言葉も食べ物も違う異国で、生活を送らねばならないのです。不安に思うこともあったかも知れませんが、

しかし太郎は、そんなことにくよくよするような青年ではありませんでした。



海外渡航免許状

心の中には強い使命感と、新しい勇気がみなぎっていたに違いありません。「器械芸術は彼に取り、仁義忠孝は我に存す。」(科学技術の面では外国のすぐれている点を大いに学びとろう。しかし、人としてのあるべき姿、精神の面での手本は我が国にあるのだから、これを守つていこう。) 尊敬する郷土の先輩、橋本景岳のこの言葉をかみしめていたに違いありません。

そうしているうちにも、太郎が日本を離れる時は、日一日と迫ってくるのでした。

太平洋を越えて

慶応三年(一八六七年)二月十三日、日下部太郎は、大きな期待と新たな決意をその胸にひめて、長崎を出発しました。太郎を乗せた船は、美しい入江の続く長崎の港を、鮮やかな航跡(船が進んだあとに残る波や白いあわ)を残して、静かに進んで行きました。

目指すは、アメリカ、ニュージャージー州、ニューブランズウィック市です。ニューブランズウィックは、ニューヨーク市の南西約五〇キロのところにある小都市です。ここに、太郎の留学するラトガーズ大学はあつたのです。

この大学は、アメリカでも歴史が古く、それに、日本最初の駐日米国公使、バート・H・ブルンなどによつて紹介されてきたこともあつて、当時の日本では、よく知られていた大学の一つでした。

太平洋の荒波を越え、百五十日の長い船旅を終えて、目的地ニューブランズウィック市に着いたのは、七月十三日のことでした。

ニューブランズウィック市は、静かで、美しい町でした。町のどこどこにこんもりとした小さな森が茂り、茂みの上には、教会の塔の先端が見えがくれています。町の中は、白壁に赤や緑の屋根を乗せた積み木のような家々が整然と立ち並んでいました。町のはずれには、ラリタン川がゆつたりと蛇行し（曲りくねって流れる）おりからの夏の日ざしに、きらきらと輝いていました。空はぬけるように高く、それに目にしみるような青さでした。

太郎はここで、伊勢佐太郎、沼川三郎という二人の日本青年の出迎えを受けました。二人は兄弟で、太郎が長崎に遊学して、フルベツキ校長のもとで勉強していたときの学友でもありました。二人は航海学を勉強するため、一年前に、密航者としてここに来ていたのでした。二人はまた、当時、福井藩の政治の相談役として活躍していた横井小楠という人のおいにあたり、これまた不思議な縁でした。見知らぬ異郷の地で、思いもかけず知人に出会った太郎は、どんなにか勇気づけられたことでしょう。

ラトガーズ大学生、日下部太郎

太郎は、ラトガーズ大学に入学する前に、同大学の付属中学校のグラマー・スクールに入り、ここで、まず英語と基礎教育を受けることになりました。長崎で英語を学んだとは言え、ぶ厚い外国の原書を読みこなすには、大変な苦勞があつたに違いありません。

そうした太郎に、時にはきびしい先生として、またある時には、温かい友人として、いろいろと忠告やはげましをしてくれたのが、W・E・グリフィスでした。彼は、ラトガーズ大学理学科に学びながら、このグラマー・スクールで教師をしていたのでした。彼は太郎より二歳年長の青年でした。

勉強熱心な太郎は、ここでも才能を發揮しました。そして成績優秀のため、留学の翌年慶応四年（一八六八年）には、いきなりラトガーズ大学の二年生に編入されるほどでした。太郎のラトガーズ大学での勉強が始まつたのです。

この大学で太郎が学んだ学科は、天文学、地理学、数学、物理学、化学、植物学などのほかに、機械学、建築学、製図学、鉱物学、生理学、歴史学といった広い分野におよぶものでした。

英語で書かれた教科書をただ読むだけでも大変だったでしょうに、こんなに多くの専門的な知識を勉強したのです。太郎の読んだ洋書は、二百冊あまりにも達し、その一部は現在も福井市立郷土



日下部太郎蔵書

歴史博物館に大切に保存されています。また、それらの本のところどころには太郎の書き込みなど
があつて、その努力の跡がうかがわれるのです。

太郎は、留学生としての使命を片ときも忘れませんでした。なによりも自分が日本に生まれた、
日本の青年であることに誇りをもち、どんな困難をも恐れず立ち向かつていったのです。

一日の授業が終わつても、太郎は大学の図書館で原書を読みふけりました。下宿にもどつても夜
遅くまで机に向かいました。わずかなランプの明かりを頼りに、一行一行指先で確かめながら、む
ずかしい専門書にいきまきました。熱心なあまり、つい朝になつてしまうこともたびたびでし
た。

こんな太郎でしたから、成績もぐんぐん上がり、やがてクラスの首
席をしめるようになりました。青い目の学友はもちろん、大学の先生
たちも、太郎のこの勤勉さと優秀さには、ただただ驚くばかりでした。
でも、太郎が人々から賞賛されたのは学力のせいばかりではありません。
そんなで、何事にも誠実で、礼節正しく、それに快活な太郎の人柄
がだれからも好かれたからでした。

太郎のそんな人柄に大きく心を動かされたグリフィスは、のちに
「彼は有能な青年であり、研究心に燃える立派な、明朗な性格の持
ち主であつた。私は、心ひそかに敬意を払い、深く日本の国風をあ

こがれるにいたった。」
と感想を述べています。

生活の苦しみ

学業では、そんなにすばらしい成果を修めていた太郎でしたが、生活そのものは苦勞の連続でした。太郎を最も悩ませたのは、経済上の苦しみでした。

そのころ、太郎は藩から年間一〇〇両の手当てをもらっていました。

後年、福沢諭吉ふくざくゆきちが書いた「福翁自伝ふくわうじでん」によると、一八六〇年ごろのアメリカは、驚くほど物価が高く、物によつては日本の数十倍、平均的にみても数倍はしていたことが記されていますから、太郎の一年の生活費は、実質上は百万円前後であつたと思われまゝ。それに当時は交通の便も悪く、手当て金のとどくのはいつも遅れがちでした。

そんな中での留學生活です。学費、住居費、衣料費、光熱費、本代などの出費を考えると太郎の生活は大変苦しいものだつたはずです。

小遣こづかいはもちろん、時には食事まできりつめ、本代や学費にあてるようなこともあつたでしょう。部屋なども、苦しくなるにつれ、少しでも部屋代の安いところをさがさなければなりません。

また、ニューブランズウィック市は、青森県と同じくらしいの緯度のところにあり、雪こそ青森ほどではないにしても、冬季間の寒さは大陸特有のきびしいものがありました。

太郎は、うす暗い屋根裏の自分の部屋で、体を暖める暖房もなく、こごえる手に、何度も何度も息を吹きかけながら、身をさすような寒さにも耐えて、専門書に立ち向かっていたことでしょう。

困った太郎は、留学費をふやしてもらえよう藩に申し出ました。その結果、明治元年（一八六八年）には、二五〇両が支給されるようになりましたが、生活の状態はあまりよくなりませんでした。心配した故郷の両親は、家の道具の一部を処分して一〇〇両の金を太郎に送りどけたということです。

しかし、太郎の苦しみはそれだけではありませんでした。異国の食生活に慣れず、生活の疲れや過労が重なって、体調をくずしてしまったのです。微熱を感じる日もしばしばでした。

大学の先生や学友も、太郎の健康を気づかって休養をすすめました。太郎はそれに耳をかそうともせず、相変わらず勉学に打ち込む毎日を送るのでした。

おそいかかる病氣

そんな時、日本では徳川幕府の政治が終わりをつげ、年号も明治とかわって、新しい政府が誕生し

たことが、米国にもいち早く伝わってきました。それを聞いた留学生たちの動揺と不安はどんなだったでしょう。

それに加えて太郎の元へは、故郷の父、郡右衛門から、次のような内容の便りが届けられたのでした。

それには、今年（明治二年）の春、藩に大改革があり、役職が解かれ、免職になったこと、また正月には、弟の次郎、三郎があいついで死んだこと、それに生活も苦しく、一日も早い太郎の帰国を待ちわびていることなどが弱々しい文字で述べられてありました。

あれほど太郎を励ましてくれた、氣丈夫な父が、こんなことを言うてくるのはよくよくのことでした。太郎の心は乱れるのです。一日も早く帰国して、両親をなぐさめてあげたい。できれば新しい政府で自分に合った役職について仕事に励みたい。父を安心させたい。そう考えることもしばしばでした。

しかし、卒業をあと一年にひかえて、太郎の決心はゆるぎませんでした。太郎は父に申しわけないと、心の中で手を合わせてわびるのでした。

そして、太郎は今までに倍して、勉学に励むのでした。太郎は体の不調を感じながらも、寝食も忘れるほどに学問に没頭しました。

しかし、生活の苦しみと過労は、しだいに太郎の体をむしばんでいきました。恐ろしい病気が太郎におそいかかっていたのです。

日ごとに顔色は悪くなり、はげしい、重いせきが続くようになりました。卒業を目前にして、とうとう病いに倒れた太郎は、ニューブランズウィック病院の一室に、その疲れ果てた身を横たえるのでした。病気は、おそろしい肺結核はげつかくでした。

異国に眠る

太郎はどんなにか悔くやしかったに違いありません。二十六歳の若さで、しかも卒業を目の前にして病いに倒れてしまったのです。

太郎の学問への強い意志と情熱はいささかも衰おとろえませんでした。日によって、少しでも気分のいい時は、もう病室の白いベットの上に枕まくらを支えにして半身を起こし、ペンを走らせるのでした。友人が止めるのも聞きません。医者に注意されても読書を続けるのでした。

現在なら完全に治せる肺結核も、当時はまだ、その病原菌きえんの正体も明らかにされておらず、まして治療法ちりょうほうなど分っていませんでした。

太郎の病状はどんどん悪化していきました。太郎は医者から、とうとう絶対安静を言い渡されました。それでもかくれて本を読んでいるようすに、担当の医者は、太郎の持ち込んでいた全部の書物を取りあげてしまったほどでした。



日本人留学生墓地
(向って右端、日下部太郎の墓碑)



日下部太郎墓碑の台座

しかし、この時はもう最期の時が迫っていたのです。
その生命の続く限り、学問に生きた留学生、日下部太郎は、明治三年（一八七〇年）、四月十三日、静かに、まるで眠るのように、その二十六歳の短い一生を閉じたのです。

異国の留学生日下部太郎の死を、ラトガーズ大学では心から悼みました。

彼の遺体は、銀のふたでおおわれた鉄製のひつぎに納められ、親しかつた学友や大学関係者、それに一般の市民までに見送られ、大学の隣りにある柳の木々に囲まれた美しい墓地、(ワイロー・グローブ・セミタリ)に埋葬されました。

さらに大学は、日下部太郎の学業と人物の優秀さを認め、彼に卒業生と同等の資格を与えました。そればかりか、大学卒業の優等生ばかりで組織されている、ファイ・ベーター・カツパーの会員に彼をすいせんし、その印として、名誉ある金の鍵を贈って、留学生、日下部太郎の生涯をたたえたのでした。

第二部

日本の良き理解者

グリフィス

日本の良き理解者

グリフィス

大きな出会い

ラトガーズ大学は、ニューブランズウィック市にある大学の中で、最も歴史の古い大学です。

この大学は、一七七六年にアメリカ八番目の大学として建てられたクインズ単科大学が、その始まりです。

ラリタン川沿いにある学園は、とても広々としていて、ところどころ芝生におおわれた美しい広場があります。構内の木立ちの間には、落ち着いた、古めかしいレンガ造りの校舎が立ち並び、回りの風景とみごとな調和を見せているのでした。

グリフィスが歴史と伝統あるこのラトガーズ大学に入学した



ラトガーズ大学

のは、一八六五年のことでした。

大学で理科コースを選ぶことになったグリフィスは、専門の物理、化学といった理科の勉強はもちろんのこと、ギリシャ・ラテン・フランス・ドイツ語などの外国語、さらに、哲学や歴史学まで、大変広い分野の勉強を熱心に続けました。

かれは非常に積極的な青年でした。学業のほかにも、大学の月刊新聞を作ったり、随筆ずいひつを発表して賞を受けたりしました。またある時は、学内の弁論大会で、何百人もの聴衆ちゆうしゆを前に堂々と意見を述べ、ただ一人演説賞を受賞したこともありました。もちろん、専門の理科の研究では、自然科学賞という素晴らしい賞をもらっています。

こんなグリフィスでしたから、卒業の時には、優等生として、名誉あるファイ・ベーター・カッパの会員に選ばれました。

大学時代のグリフィスにとって大きな出来事は、日本の留学生、中でも日下部太郎に出会ったことでした。それは、かれが大学二年の時のことです。

当時、グリフィスはアルバイトとして、大学付属中学校のグラマー・スクールでラテン語とギリシャ語を教えていました。そのラテン語を勉強する学生の中に、日本からの留学生、日下部太郎がいたのです。

授業中、背すじをびいんと伸ばし、しっかりと目を見開いて聞き入る日下部太郎の、あまりにも真剣な態度に心をひかれました。それにもまして、日下部の何事につけても誠実で、礼儀正しい態

度に、強く心をうたれたのでした。

グリフィスは、いつか日下部太郎を友人として、人間として心から尊敬するようになりました。その尊敬の気持ちは、やがて日下部を生んだ日本という国にも深い関心を持たせるようになっていきました。もともと、中国に強いあこがれを持っていたグリフィスですから、同じ東洋の日本にも身近なものを感じたのかも知れません。

人と人との出会いは、時には思わぬ大きな結果を生むことがあるものです。グリフィスと日下部太郎の出会いもそうでした。それはまた、グリフィスと日本、グリフィスと福井との大きな出会いでもあったのでした。

夢見る少年

ウイリアム・エリオット・グリフィスは、日下部太郎より二年早い一八四三年、九月十七日、アメリカ、ペンシルバニア州、フィラデルフィアにリメバーナ家の四番目の子として生まれました。

父のジョン・リメバーナは海運業の仕事をしていました。母のアンナ・マリア・ヘスは信心深いクリスチャンで、教会の日曜学校で教えることもありました。

信心深く、心の優しい少年に育ったグリフィスは、フィラデルフィアのラリタン初等学校、中等

学校など公立学校で学びました。

少年時代のグリフィスは、夢見る少年でした。

グリフィスは、そのころ仕事で世界の国々を回っていた父や祖父から、その航海の話聞くのがとても楽しみでした。父や祖父がしてくれる話は、グリフィスが今まで聞いたこともない不思議なおもしろい話ばかりでした。グリフィス少年の夢は、世界の見知らぬ国に向かってどんどん広がっていききました。

のちにグリフィスは「支那物語」という本の中で次のように書いています。

「私は、父や祖父が航海に出ると、もう次の日から、その帰りを指おり数えて待っていた。おみやげも楽しみだったが、航海中の話や持ち帰ってくるめずらしい品物を見るのが本当に楽しみだった。中でも、彩りの鮮やかな支那（中国）の品物は私を夢中にした。もつと支那のことを知りたいと思った。フィラデルフィアにあった支那の美術館にもたびたび通った。そのうち、私もいつか、行ってみようと思うようになった。……」

グリフィスは、このように、神秘的な東洋の国に心ひかれ、未知の世界にあこがれる夢多き少年だったのです。

牧師への道

公立の中等学校を卒業して、セントラル高等学校に入学したところのことです。グリフィス一家に不幸な事件が起きました。

父の海運事務所が火災にあい全焼してしまったのです。その上、不景気と事業の失敗までが重なり、いちどに生活が苦しくなってきたのです。

兄のモントは船員になって働きました。一番上の姉、マーガレットは弟たちの世話をしながら家庭教師をして家計を助けました。

グリフィスは高校を中退し、父の友だちの世話で宝石会社に就職することになりました。苦しい生活が続きました。

でも、この苦しい生活のおかげで、グリフィスは、いつか人生や世の中について深く考える青年になっていきました。仕事のひまをみては、図書館に通い、文学や歴史の書物を熱心に読んだのもこのころでした。また、詩を書いたり、演劇に参加したりして活躍しました。

ちようどそのころです。アメリカ全土を二つに分けて争った南北戦争（一八六一〜一八六四）が起こったのです。これは、奴隷い制度のあり方をめぐっての戦いでもありました。グリフィスは北軍の一兵士として戦いに行きました。

そして、この南北戦争の体験をとおして、グリフィスは、人間の心の奥深い問題に目を向けるようになっていきました。将来、立派な牧師になろうと決意するようになったのでした。牧師という職業は、人の悩みや生活上のいろいろな相談にのってあげなければなりません。牧師になるには、教会の勉強はもちろんのこと、社会に役立つ知識、それに何か国かの外国語も学ばなければなりません。

二十二歳になっていたグリフィス青年は、ラトガーズ大学に入学したのでした。一八六九年、大立派な立派に卒業したグリフィスは、つづいてニューブランズウィック神学校に入学しました。そして次の年の一八七〇年、二月、グリフィスは、ニューヨークのノックス・メモリアル教会で最初の説教をしました。牧師として第一歩をふみ出すことになったのです。

新たな使命

ラトガーズ大学の講師として、また教会の牧師として、グリフィスのいそがしい毎日が始まりました。

教会の回りのポプラがほんの少し黄色に変わりはじめたころのことでした。

グリフィスは、グラマー・スクールの校長のライリー教授から一通の手紙を受け取りました。内

容は、「日本へ行つて、専門の自然科学を教えながら、日本の教育の仕事の手助けをしてみないか。」
という意味のものでした。それは、福井藩からの招きの手紙でもありました。

あまりにも思いがけない話でした。やつと牧師としての生活も始まつたばかりです。それに、そのころの日本といえば、まだ頭の上のみような髪をのせ、腰にはぶつそうな刃物をつけた人間が住む野蛮な国だと思われていたのです。グリフィスは、ともかくもこの話を断りました。

しかし、大学の先生や親しい友だちは、グリフィスのこの決定を残念に思いました。グリフィスの学問の力がそのままになってしまふことを惜しみました。それで、外国へ行つて、学問や技術を教えることも、教会の大切な仕事の一つであり、神の教えでもあると言つて、グリフィスを励ました。

そう言われても、簡単に決心のつくものではありません。グリフィスにとっては、人生の一つの別れ道に立つたようなものです。グリフィスは悩み、苦しみました。しかし、数日後、グリフィスは大きな決心をしました。姉のマーガレットへ次のように自分の気持ちを打ち明けたのです。

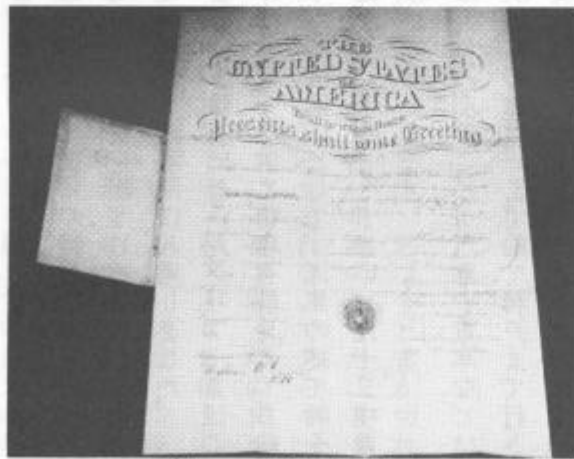
「私は日本に行く決心をしました。私の学んだ自然科学の知識や技術が、その国や国の人たちのために役立つならこんなうれしいことはありません。困っている人たちのために何かお手伝いをする。……これは、私が一生をささげようと決心した教会の仕事と同じだと思います。……これが私の仕事だと思えます。……たとえ不幸がおそつてきても、病気でやせ衰えても、途中で死ぬようなことがあつても、決して後悔したり、心変わりしたりはしません。」

いろいろの迷いの中で、こう決意したグリフィスの心の中には、若くして異国の地で亡くなった日下部太郎の面影がはつきり浮かんでいたのに違いありません。グリフィスは、はつきりと福井に行くことを心に誓ったのでした。自分に与えられた新たな使命を心からかみしめるのでした。

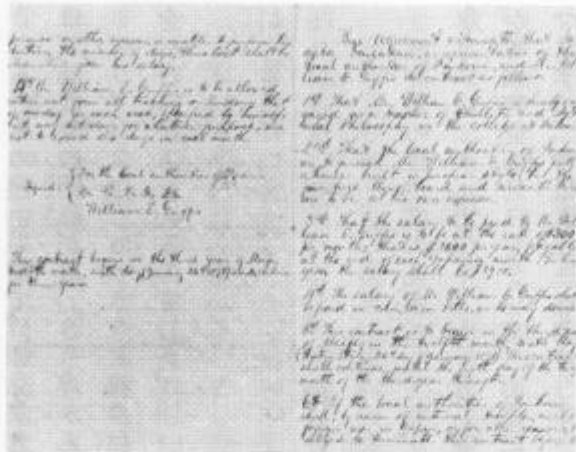
グリフィス福井へ

福井藩の理化学の先生として招かれることになったグリフィスは、一八七〇年、十一月、親しい人々に見送られながら故郷をあとにしました。出発にあたって母のアンナ・マリアは、「神はあなたをお守り下さいます。日本へ真理の言葉を持って行くのです。」と言って、グリフィスの旅立ちを優しく見守ったのでした。

いろいろな手続きや準備を終えたグリフィスは、十二月一日、いよいよアメリカ西海岸の港町、サンフランシスコから日本へ向けて船出しました。それは、日下部太郎が二



グリフィス博士パスポート



福井藩との契約書

ユーブランズウィック市で亡くなってから、わずか八か月目のことでした。この船の行きつくところ、あの水平線の向こうに日本はあるのです。自分の新たな使命が待っているのです。船のデッキにたたずみながら、グリフィスは思わずこぶしを握りしめるのでした。グリフィスを乗せた船は、暮れも押しつまった十二月二十九日、無事、横浜港に入港しました。

現在、福井市立郷土歴史博物館に保存されている資料によれば、横浜に着いたグリフィスはここで、福井藩と「福井の学校で化学と物理を教える」「月給は三〇〇ドルを支払う」「藩は住いとして、洋風の建て物を用意する。」「期限は三か年とする。……といった十三項目にわたる契約書をかわしています。

当時は、自動車はもちろんのこと、汽車や電車などはありませんから、横浜からの旅は、まず船で神戸まで行き、あとは神戸から大阪、伏見、大津までは陸路を、大津から舟で海津へあがり、海津からまた陸路で敦賀、今庄、武生、福井へと馬やかごを乗りついでの大長旅でした。日本人に比べて体の大きいグリフィスにとって、かごでの旅はどんなにきゆうくつだったでしょう。とくに敦賀から今庄への木ノ芽峠^{キノノエ}越えは、旅慣れた地方の人でさえなかなかの難所

した。グリフィスは、日本の交通の不便さ、文明のおくれをふと思ったかもしれませんが。

グリフィスが横浜を出発したのは、一八七一年(明治四年)二月のことで、福井には三月四日に着いています。その日グリフィスは、最終の目的地福井に向けて、朝早く府中(今の武生)を出発しました。渡し舟で日野川を渡り、途中浅水の村でしばらく休み、正午近くめざす福井に入ったのでした。

「あそこが福井です。」付きそいの藩の武士が指さす方を、グリフィスはじいっと見つめました。どうとう福井にやってきたのです。

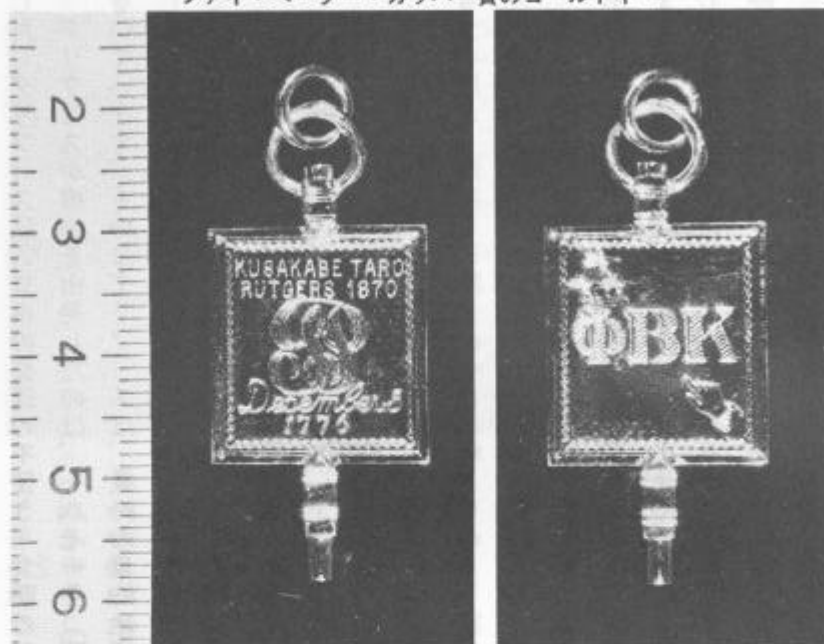
グリフィスは、その時の印象を次のように語っています。

「福井が見え出した。そしてナカムラが『あそこが福井だ』と言ったとき、ちょうど雲が切れ、雪空の間から幾筋もの陽光が金色に輝きながら、福井の町を照らし出した。平原のあなたにくつきりと浮かびあがった福井の町……その時のげんしゆくな感動を、私は、一生忘れないであろう。」と。

翌日、藩の役所で着任のあいさつをすませて宿舎にもどったグリフィスは、日下部太郎の父、ハ木寿(郡右衛門)を迎えました。グリフィスは、大きな手で太郎の父の手を、しっかりと握りしめました。二人の間に、言葉などありません。ただうなずき合うだけでした。グリフィスは、ラトガーズ大学からの、ファイ・ベーター・カップ協会から預かってきた金の鍵を手渡しました。日下部太郎に代わって、父、寿の手に、今しつかりと名譽ある金の鍵は渡されたのです。

太郎の病死で母のおくまも悲しみのあまり亡くなっており、さみしい毎日を送っていた父の寿で

ファイ・ベーター・カップ賞のゴールドキー



(裏)

(表)

した。グリフィスには、この父親の気持ち
 ちが痛いほどわかります。そして、日下
 部太郎との深い縁を思い、あすからの自
 分の仕事の大切さを心から思うのでした。

福井でのグリフィス

グリフィスが教えることになった藩校
 は、「明道館」から「明新館」に名が改め
 られていました。三月七日、早くも、明
 新館での授業が開始されました。

学校での授業は、最初、物理学と化学
 から始まりました。物理や化学の勉強は、
 本を読むだけではなかなかわかりにくい
 ものです。グリフィスは、どんどん実験
 を採り入れて授業をしました。なにしろ、

磁石にくぎが吸いつけられるのさえ不思議で、めずらしくてしかたのなかつたころです。教室は、驚きと感嘆かなたなの声で大変なものでした。科学は、魔術ではないことを、グリフィスは実験をとおして、いねいに、根気よく教えました。

グリフィスの熱心な気持ち、生徒たちに伝わらないはずはありません。生徒たちもグリフィスにこたえて真剣に取り組みました。わからないところはどんどん質問しました。そんな生徒たちにグリフィスも、一つ一つていねいに答えるのでした。

それに、これは学校に限ったことではありませんでした。一日の仕事を終えて、宿舎にもどり休んでいるときでも、時には夜中にできえ、質問を持って尋ねてくる生徒たちを、温かく迎えるグリフィスでした。

グリフィスの熱心でやさしい人柄は、やがて町の人にもわかってきました。最初は、体の大きい、青い目の異人さんを気味わるがっていた人たちも、一人、二人とグリフィスを訪ねるようになりました。グリフィスは、こうした町の人たちにもわかりやすく、親切に教えました。生物や地質学、英語やドイツ語、さらにアメリカの歴史、キリスト教の教えなど、いろいろな科



グリフィス博士と生徒たち

目について、特別の授業をしてくれたのでした。グリフィスは、自分自身の勉強も忘れませんでした。とくに、日本語の勉強です。あらゆる機会を利用して、人々との交際を広げ、日本語に慣れるよう努力しました。のちには、授業も日本語でやれるようになったほどでした。

グリフィスの努力の結晶として忘れることのできないのは、理科実験室を作ったことでした。実験の大切さを考えたグリフィスは、早くから計画を進め、外国から実験の器具を取り寄せるなどして、そのころの我が国でも有数の実験室を作りあげたのでした。

九月のことです。藩との約束の一つであった洋風の建物がやっとできあがりしました。これは、福井では初めての洋館で、現在の中央三丁目、足羽川沿いに建てられました。ペランダのついた淡いグリーン色の、モダンな、この洋館は、町の人たちに「異人館」と呼ばれ、当時、多い日には、一日に数千人もの人が見物に押しかけたそうです。また、グリフィスには、月給として、月三〇〇ドルが支払われていましたが、これは藩の家老か上級武士の身分にあたる扱いでした。このことをみても、藩が若者の教育をとても大事に思っていたことがわかります。それだけ、グリフィスに対して、大きな期待を寄せていたことがうかがえるのです。

そして、この期待にこたえて、グリフィスは、昼といわず夜といわず、福井藩の教育のために立派に自分の使命を果たしたのでした。



異人館(向って左グリフィス館)

グリフィスにとって、もっと大きな喜びは、知識を教えることよりも、国も、言葉も、習慣も違う人間どうしが、一つの目的のために、こんなにもお互いが助け合い、信頼し合っていけることを発見したことだったかも知れません。

別　　れ

こんなに生徒たちや町の人たちからしたわれ、信頼されていたグリフィスが、福井に来てわずか十か月で、福井を去らなければならぬような事件が持ちあがりました。

明治政府は、明治四年（一八七一年）七月に、藩をなくし、武士という身分をなくす廃藩置県の令を各藩に出していました。福井藩では、いろいろの準備で十月一日に、藩を解く式が行われることになったのでした。

この日、旧藩主であり知事であった松平茂昭（春嶽公の養子）が福井を去り、東京に行くことになったのです。グリフィスは、のちに「皇国」という書物の中で、次のように書いています。

「朝早くから、かみしもを着た武士が、主君に別れを告げるため、城内の本丸大広間に続々と集合した。大広間は武士でいっぱいだった。皆、両手をつけて頭をうなだれていた。それは、その日の、その場所の、意味の大きさにじいっと耐えているようであった。それは、単に藩主に対する別

れの気持ちだけではなく、彼らの父や祖父やその祖先が、三〇〇年にわたって送ってきた武士の生活、そのものへの別れでもあった。どの顔も、心細い将来を手きぐりで求めようとしているかのようであった。」

グリフィスは、この時、大きく変わろうとしている日本の姿を、はつきりと鋭く感じとっていたのでした。

藩がなくなるという大事件に関係なく、グリフィスの明新館での授業は続きました。授業だけでなく、日本人にもわかる教科書づくりに励むなど、その熱心さは少しも変わりませんでした。グリフィスが心を痛めたのは、教え子の生徒や親しかった人たちが、次々と福井を離れていくことでした。

しかし、グリフィスにとって、契約主である福井藩がなくなってしまうことは、やはり困ったことでした。

年が明けて、一月十日のことです。東京から二通の手紙が届きました。一通は、親しく交際していた由利公正（五か条の御誓文の起草者）からのもので、東京へ早く来るようにとの手紙でした。もう一通は、フルベッキ（日下部太郎が長崎に遊学していたときの先生）からのもので、東京に新しくできる工芸学校の先生にどうかという手紙でした。グリフィスは迷いました。グリフィスのその日の日記によると、「……昼、思案、夜、思案……。」と書かれていますから、そのことについてよほど考えこんだに違いありません。

グリフィスをしたう人たちは、うわさを聞いて、なんとか福井にとどまっておほしいと願いました。しかし、グリフィスを招いた藩がなくなってしまったのです。しかたがありません。グリフィスは、東京へ行って、今度は広く、日本の教育のために尽す決心をしたのです。

福井での最後の授業は、一月二十日に行われました。生徒たちは涙で顔をくしゃくしゃにしなから、最後の授業を受けたのでした。

一月二十二日、いよいよ、グリフィスが福井を去る日です。その日は、朝から雪がはげしく降り続いていたのでした。

深いきずな

東京へ出たグリフィスは工芸学校ではなく、大学南校（のちの東京帝国大学）で、化学、物理、精神科学などを教えることになりました。八月には、姉のマーガレットが日本に来て、日本で最初の女子の官立（国立）の学校、東京女学校で教えることになりました。グリフィスは、明治七年（一八七四年）七月、姉とともに帰国するまで、我が国の新しい教育のために、数多くの立派な仕事をしました。

グリフィスは一八七六年、日本や福井での経験や知識をもとにして、有名な「皇国」という本を

出版しました。これは新しい日本の研究書として、多くのアメリカ人に読まれました。グリフィスはそのほかにも、「日本の民話、美術」「日本の宗教」「日本のことわざ」など、多くの本を書いて、日本の紹介につとめました。それだけではありません。すでに発行されていたアメリカやイギリスの日本に関する書物で、まちがって書かれていることを、講演会や新聞で訂正しました。日本のすぐれている点を正しく紹介してくれたのでした。グリフィスは日本にとっても、良き理解者の一人でした。

さて、一九二六年、十二月、すでに八十三歳になっていたグリフィスは、日本政府の招きによって、夫人フランシスとともに再び日本を訪れました。政府は、グリフィスに勲三等旭日章を贈って、これまでの功績をたたえました。

グリフィス夫妻は、日本各地を回り、なつかしい福井には、翌一九二七年（昭和二年）四月二十五日に立ち寄りました。吹雪の中を福井を去って、実に五十五年ぶりのことでした。

その時、福井駅に出迎えた市民は、一、五〇〇余名にも達したといわれています。人々は手に手に小旗を打ちふり、心からグリフィス夫妻を歓迎しました。福井市では夫妻に、羽二重の紋付の着物ひとそろえを贈りました。グリフィスは、福井中学など二千



グリフィス夫妻歓迎風景



グリフィス夫妻

よみがえる心のかけ橋

数百人の福井の生徒たちを前に講演し、深い感動を与えました。
四月二十九日、福井を去るにあたって、グリフィス夫妻は、日下部太郎のために、何か記念になることを計画してほしいと、お金を寄付しました。人々は、グリフィスと日下部太郎、グリフィスと福井との深いきずなを、いまさらのように感ずるのでした。

その生涯を通して、日本に対し、福井に対して、深い理解を示し続けたグリフィスは、一九二八年、二月五日、フロリダ州、ウインター・パークの別荘で、その八十五歳の実り多い一生を終えたのでした。

第三部

よみがえる心のかけ橋

よみがえる心のかげ橋

よみがえる交流

ニューブランズウィック市やラトガーズ大学と福井市との交流は、その後はつい最近まで、残念ながらとだえていました。

もちろん、その間には、日本という国自体が満州事変、日中戦争、太平洋戦争、終戦、再建という激動の時代の中にあつたという事情がありますし、福井市についても、戦災、震災、風水害、復興と、毎年毎年それはそれは、大変なことの連続であつたという事情がありました。

さて、昭和四十九年のことです。郷土の歴史を勉強していた福井青年会議所の人たちが、日下部太郎についてもっとくわしく調べるために、ラトガーズ大学に、その資料を収集に行くことになりました。そして、その時、福井大学の学長の大事な手紙をラトガーズ大学の学長に届けました。こうして、グリフィスが亡くなってから四十六年目、日下部太郎が亡くなってから一〇四年目にして、再び交流が始まったのでした。

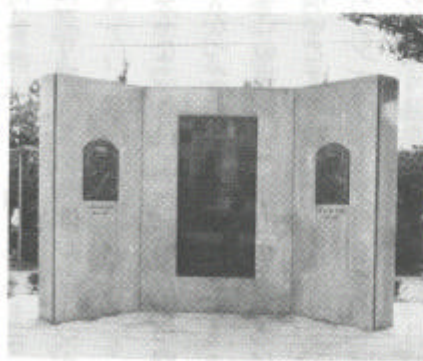
ラトガーズ大学を訪れた会議所の人たちは、副学長のバークス氏の案内で、ワイロークロップの

墓地に行きました。めざす日下部太郎の墓は、角柱型の石碑が頭から折れて、横倒しになったまま、雑草の下になっていました。草をきれいに取り除き、石をなでるようにして表の文字を読むと、「タロー・クサカベ、日本越前生まれの人、一八七〇年、四月十三日死去、二十五歳」と書いてあります。日下部太郎の墓です。会議所の人たちは、福井の日下部太郎の先祖の墓から持ってきた故郷の土を、そのそばにまくと、静かに合掌して、冥福を祈ったのでした。

その後で、会議所の人たちは、ニューブランズウィック市の市長を訪問することにしました。お墓のことで交渉するためでした。気持ちよく会ってくれた市長は、会議所の人たちの申し出にうなずくと、市としても、以前からいろいろと計画しており、日下部太郎ら日本人留学生の墓は、新しくできる公園の中央に移す考えのあることを話してくれました。図書館や大学で貴重な資料を集めた会議所の人たちは、福井にもどると、このことをすぐ大武市長に話しました。

このことをきつかけとして、日下部太郎とグリフィスの深いきずなを、いつまでも後の世の人に語りついでいこうとする計画が、どんどん進んでいくことになりました。

福井青年会議所の人たちは、昭和五十一年、日下部太郎とグリフィスの記念碑を市立図書館の横に建て、十一月には、アメリカの駐日大使やラトガース大学副学長らを迎え盛大な除幕の式を行



涙 碑

いました。

この記念碑は、「**墮涙碑**」を中央に、右側に日下部太郎、左側にグリフィスの胸像レリーフがはめこまれています。

墮涙とは、涙が落ちこぼれるという意味です。これは、太郎が亡くなった後で、父の寿が市内の清円寺（宝永四丁目にある）に、墓碑を建てようと、その文章を、かつて橋本景岳の先生でもあった吉田東篁という人に頼んだものでした。それは志をどげず、早くこの世を去った息子のために、

せめてその一生を後世に伝えてやりたいとする親心でした。

昭和五十二年、大武市長はニューブランズウィック市を訪問し、ラトガーズ大学内の教会で日下部太郎の追悼法要を行い、ニューブランズウィック市長に二、〇〇〇ドルを寄贈して、墓地の復元を頼んできました。

また、福井大学では、昭和五十三年四月、ラトガーズ大学副学長一行が福井大学を訪問したのをきっかけに、五十四年に、福井大学を中心に「日下部太郎・グリフィス学術文化交流基金」という事業を計画して、ラトガーズ大学との交流を深めていくことになりました。この基金は、日下部太郎やグリフィスに関する資料室を作ったり、ラトガーズ大学へ研究者を送ったり、また、学生や生徒の国際交流を盛んに



大学内の教会

するために使われるとのこと。

このようにして、福井市とニューブランズウィック市、福井大学とラトガース大学との一段と幅広い交流が始まったのです。

深まる友好

ここで、ニューブランズウィック市について簡単に紹介しておきましょう。

ニューブランズウィック市は、初めのころは、イニアンズ・フェリーと呼ばれていましたが、イギリスのブランズウィック公であるジョージ一世にちなみ、のちには、ニューブランズウィック (New Brunswick) となりました。市制は、一七八四年にひかれました。市はニューヨークから南西約五〇キロ離れたニュージャーシ州の中央部に位置し、その昔、運河として栄えたラリタン川が市内を流れています。面積は、一四・二平方キロで、人口は約五万人です。

この町はラトガース大学を中心とする学園都市で、小学校から大学まで、十一の公立学校、五つの私立学校があり、生徒、学生の数は市の人口のおよそ半数をしめています。公共施設のいきとどいた町で、学生たちは、毎日、楽しくのびのびと勉学やスポーツに励んでいます。

三〇〇年もの古い歴史を持つこの町は、その歴史を物語る史跡や建物が多く、町全体がまるで博



郷土歴史博物館を訪れたリンチ市長一行

物館のようだとされています。

主な産業は、医療器具、医薬品、家具、ガラス、ゴム製品、自動車部品などの製造です。

さて、昭和五十五年十二月、ニューブランズウィック市は、市の三〇〇年祭の一つの行事として、「日本のまつり・福井展」を開き、福井市長と福井大学長を招きました。

福井からも、福井市の昔からの文化や伝統芸能、それに、現在の福井市の自然と産業のようすなどを、写真やパネルにして持っていく人々に紹介しました。この福井展は、大変喜ばれました。ま

た、ニューブランズウィック市の人たちも、福井市のことをシスター・シティー（姉妹都市）と呼んで温かく歓迎してくれるなど、両市の交流はますます深まりました。

そして、昭和五十六年十月、今度は、福井市が、ニューブランズウィック市のリンチ市長を三日間にわたり招待しました。

その間、リンチ市長一行は、市立郷土歴史博物館や市立図書館にある日下部太郎・グリフィス関係のいろいろの資料を、ていねいに見学しました。とくに、歴史博物館に保存されている日下部太郎のラトガーズ大学留学時代に用いた書物や福井藩に招かれたグリフィスの契約書、書簡（手紙）には、深

く感動し、両市の深いつながりを改めて感じたようでした。

大武、リンチ両市長は、両市が今後ともますます、いろいろの分野で友好を深め合い、いつまでも仲良くしていくことを、固く約束しました。そして、昭和五十七年五月には、両市の間には、姉妹都市を結ぶ調印の式が行われることになったのでした。

百年以上もの昔、福井藩の一留学生、日下部太郎とグリフィスとの間にかけられた心のかけ橋は、今、こうして、もっと大きく、もっと広く、両市に住む全ての人々とのかけ橋となつて、よみがえつたのでした。

日下部太郎の一生		主なできごと	
一八四三年 (天保一四)	(グ)ペンシルバニア州、フィラデルフィアに生まれる	一八四〇年 (天保一一)	阿片戦争
一八四五年 (弘化二)	(日)福井城下、江戸町に生まれる	一八五三年 (嘉永六)	アメリカの使節ペリー、浦賀に来る
一八五八年 (安政五)	(日)藩の学校「明道館」に学ぶ	一八五四年 (安政元)	日米和親条約、日米通商条約(五八年)
一八六五年 (慶応元)	(日)長崎の洋学校「済美館」へ入学	一八五九年 (安政六)	安政の大獄で景岳ら処刑される
一八六七年 (慶応三)	(グ)ラトガーズ大学に入学 (日)アメリカに向け長崎を出発 (日)ラトガーズ大学付属グラマースクールへ入学、グリフィスから教えを受ける	一八六一年 (文久二)	アメリカ南北戦争(一六五)
一八六八年 (明治元)	(日)ラトガーズ大学二年に編入 (グ)ラトガーズ大学を卒業	一八六七年 (慶応三)	大政奉還
		一八六九年 (明治二)	スエズ運河開通、アメリカ横断鉄道開通

一八七〇年 (明治三)	(日) ウィロー・グローブ墓地に眠る(二十六歳)	一八七一年 (明治四)	廃藩置県
一八七一年 (明治四)	(グ) 福井へ向け、サンフランシスコを出発	一八七四年 (明治七)	エジソン電灯を発明
一八七二年 (明治五)	(グ) 日下部太郎の父に会い、金の鍵を渡す	一八八四年 (明治一七)	(福井に電話がつく)
一八七四年 (明治七)	(グ) 藩校「明新館」で授業を始める	一八八九年 (明治二二)	(福井市となる)
一八七六年 (明治九)	(グ) 福井を去り、大学南校(後の東京大学)の教師となる	一八八九年 (明治二二)	日清戦争
一九二六年 (昭和元)	(グ) 姉のマーガレットと共に帰国	一八九四年 (明治二七)	(敦賀・森田間に鉄道開通)
一九二七年 (昭和二)	(グ) 著書「皇国」などで日本を紹介	一八九六年 (明治二九)	(福井に電灯がとる)
	(グ) 再び日本政府の招きで来日	一九〇三年 (明治三六)	ライト兄弟飛行機を発明
	(グ) 福井に立ち寄り、盛大な歓迎を受ける		

一九二八年
(昭和三)

(グ) フロリダ州、ウインター・パークの別荘で死去 (八十五歳)

※(グ) | グリフィス
(日) | 日下部太郎

一九〇四年
(明治三七)

日露戦争

一九一四年
(大正三)

第一次世界大戦・パナマ運河開通

一九二四年
(大正一三)

(福井に水道ができる)

一九四一年
(昭和一六)

太平洋戦争 (一四一五)

一九四八年
(昭和二三)

(福井大地震)

一九五一年
(昭和二六)

サンフランシスコ平和条約

一九五七年
(昭和三二)

人工衛星打ち上げ成功

一九六四年
(昭和三九)

東京オリンピック開催

<p>一九六八年 (昭和四三)</p> <p>一九八一年 (昭和五六)</p> <p>一九八二年 (昭和五七)</p>	<p>(福井国体開催)</p> <p>(福井大学とラトガーズ大学の学術交流に関する協定調印)</p> <p>(福井市、ニューブランズウィック市と姉妹都市となる)</p>

おわりに

皆さんは、この本を読んで、どんな感想を持ちましたか。日下部太郎とグリフィス博士、そして福井市とニューブランズウィック市との不思議な縁に驚いた人もあるでしょう。中には、二人の生き方に深い感銘^{かえめい}をおぼえた人もあるかもしれません。日下部太郎やグリフィス博士は、生まれつきの天才や秀才であったわけではありません。ただ、早くから大きな目標を持って、それに向かって一生けんめい努力し、その目標を実現した人だったのです。そして、その前向きな態度が、これほどまでに多くの人の心を動かすこととなったのです。

私たちにとって、日下部太郎のような、りっぱな人物を郷土の先輩に持つことができただのは、たいへんすばらしいことです。そして、グリフィス博士のように、福井の町を心から愛し、日本と日本の人々を温かく見守ってくれた外国人があつたことも忘れることはできません。

この本は、そうした二人の足跡^{そくせき}を、広く皆さんに知ってもらうために、なるたけわかりやすく書いたものです。

どうか、この本を出発点として、さらに深く、二人の生涯の生き方を調べてもらいたいと思います。皆さんのおじいさんやおばあさんの中には、昭和二年にグリフィス博士が、ふたたび福井を訪れた時のことを覚えておられる方もいるでしょう。また、足羽山の市立郷土歴史博物館には、日下

部太郎の読んだ書物やグリフィス博士の契約書など、多くの資料がのこされています。興味のある人は、自分の耳や目で確かめてみて下さい。そうすれば、今以上に、日下部太郎やグリフィス博士の本当の心にふれることができるでしょう。

最後に、もつとくわしく調べたい人のために、参考となる本をあげておきます。

「新日本の先駆者 日下部太郎」(永井環・昭和五年)「我等の郷土と人物」(福井県文化誌刊行会・昭和三九年)「若越山脈」(青少年育成福井県民会議・昭和四七年)「グリフィスと福井」(山下英一・昭和五四年)

福井市立郷土歴史博物館長

宇野澤 利 勝

よみがえる心のかげ橋

—日下部太郎／W・E・クリフイス—

発行 昭和五十七年四月

発行所 福井市立郷土歴史博物館

福井市足羽一丁目八一—一六

Sano Kwakabe
Rudgers College
New Brunswick

Griffis

Mrs. S. Griffis

昭和57年4月
福井市立郷土歴史博物館発行